せたかむい
発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第七十九号（一日発行）
平成八年四月一日

北海の鰊場 古平風土物語 四六

子供たちの四季の遊びと仕事の手伝い (2)

高橋源五口

量りもっこには大型の生鰊で百尾、中型以下のもので百二十尾ぐらい入った。町から遠い場所だと三割くらいの割り増しを付けて頼みに来る。これは貰った鰊を家まで運ぶのに苦労するからであった。

尋常科のまだ小さな子供たちは〝たも網〟や鰊かごを持ってサンパ船（鰊を積んで運ぶ船で生鰊を十石＝七トン半くらい積む）の側に集まり、船から落ちた鰊を拾い集めては家に運ぶ。若い衆の中には、鰊をもっこに入れる時にわざと海に落として子供たちを喜ばせたりする者もいた。

この頃になると、浜通りにはいろいろな屋台が立ち並んで急に賑やかになる。

立ち食いそば・うどん七銭、天ぷらそば・うどん十銭、漁夫が飲むもっきり（コップ酒）＝大きめのコップで十銭、焼酎＝コップ一杯七銭、おやき＝大判十銭で五個、小判は七個、オランダ焼き＝大判一枚五銭、黒ようかん＝一本七銭から十銭、落花糖＝三平皿山盛り十五銭、並盛り十銭、落花生＝皮つき山盛り一杯五銭、青梅玉＝大盛り一杯十銭、げんこつ固め＝一個二銭、あめ玉＝一銭に二個から七個、黒砂糖＝小袋一個五銭、干しいも＝中くらい一袋五銭、南部せんべい＝十銭に十二枚ぐらい、甘酒＝そばどんぶり一杯七銭、大福餅＝十銭に二個から三個、赤飯＝大皿で十銭、古平産りんご＝一個一銭から三銭

これらの食べ物類は生鰊とも交換していて、生鰊は一尾五厘（一銭の半額）から、数の子が入っていると七厘ぐらいの割りで交換していた。屋台の前には大きなちょうちんを吊ったり、カーバイトの明かりをつけて夜遅くまで賑っていた。

古平橋の両岸のたもとにも屋台がたっていた。そこの鈴木屋の愛称・ガッカさんは、同級生であった息子の万蔵君に手伝わせて、太った大きな体から流れる玉のような汗と鼻水を拭き拭き忙しくやっていたのが思い出される。

腹のすいた子供たちはそこへ生鰊を持って行っては、大人にまじって思い思いの物と交換して食べるのであった。

当時、学校では屋台の出入りを禁じていたのだが、「腹がへっては戦ができぬ」とのこともあって、屋台で寒さと空腹、疲れをいやしていたのであった。

また、この頃になるとアサヅギ（アサヅキ）が出始める。雪解けの早いリンゴの根方近くにはずいぶんと生える。鰊の三平汁や鰊のかまくら汁にはこれが最高だと、番屋の若い衆にほめられおだてられながら、毎朝のようにりんごの根方の辺りを回ってはアサヅキを採った。

りんごの木の下には、秋に取り残した （三ページ下段へ）

アイヌの［ことわざ 世間ばなし集］から

風車のこと

蝦夷地で風車を利用すれば、米をつくことも容易であろうと思われる。

そこで私の愚案ではあるが、風車を考案してみた。

まず細長い箱をこしらいその先の方にじょうご形に広がったものを取りつけ、その中に風車を仕掛ける。この口を風の方に向け風を入れれば、ずいぶんと風車の回るのに好都合であり、箱の左右に米つきや粉ひきの臼などを仕掛ければ、水車のように便利なものになるであろう。ただ風車の箱は、風向きによって方向を変えられるように仕掛けをする必要がある。

日本地（本州など）の風では力が不足でおぼつかないが、蝦夷地ではずいぶんと風が強いので、仕掛けの通り働くものと思われる。これは水車より手軽に出来るので便利なものと思っている。

蝦夷地では鰊粕をつくるとき、魚油を絞るのに人力でやっているが、この仕掛けをうまく利用すれば大変便利になるであろう。

明治13年古平へ雪の山越え

古平行の記

■九死に一生を得る

夕暮れであったが町に入ると一同の心もはずみ、疲れもいつの間にかふっとんだよう足どりもしぜんと早くなっていた。

こうして、ようやく目指す浜町三十一番地の植木清介宅にたどり着くことができたのであった。

宿に入り体を休めながら、みんな揃って九死に一生を得ることができたことを大いに喜び合い、先ずはと酒を酌み交わした。考えてみれば、無事に着いたのは誠に幸運であったとしか言いようがなく、万一のことがあった時はなんの面目があろうか。冬の山越えを軽率に実行したことを大いに恥じた。

■町の状況を見る

翌日、私はここの官吏をしている出羽佐太郎氏宅を訪ね、古平へ来た理由などを話し、また土地の様子を聞いた。その後、一緒に行ったエドワルド・パレーと近くを見て回った。

彼は、翌八日に便船を求めて余市へ行き、用務で札幌へ向かった。

この山越えの次第は、後日、パレーと私から会社の事務長に報告した。

■山越えの経過の大要

茅澗から古平までの山道での距離はおよそ七里半（三十キ）途中の山についていえば、赤土の崖の見えた山の頂上は約二千五百尺（約七百六十メートル）、中腹で野宿した所は千五百七十尺（約四百七十六メートル）、四日に泊まった小屋の所は四百六十五尺（約百四十一メートル）、大江嘉蔵の小屋は百九十尺である。古平の出羽の沢という辺りで石炭を拾ったが、上流から流れて来たものかどうか、今は雪が深いので確かめ難い。

古平湾は東北に面していて出し風（西南の風）には無難だが、西北の風は困る。冬でも船の出入りが盛んで、湾の中にいる時は大風でも難船の恐れは少ないようである。

明治七年の大風では、和船三十七隻が難破し二隻が無事であったというか、その二隻は湾内に深く入っていたものであった。三菱汽船が時々入港して、税としての物品を積んで行く。

戸数は浜町、新地方面共におよそ四百戸、鰊での税額は三万円程になるという。

鰊建網二十か所、鰊、鮭千石ぐらい、鱈は船一隻で平均二千束という。

■雪道の心得

雪道は近いといってもあなどってはならない。吹雪になると昼夜にかかわらず道を誤る。少しでもそれると軟雪に踏み入って自由を失い、疲労から死に至ることになる。

風が強いので切られるように冷たい。頭巾で十分に覆い、手袋が薄いとやけどのようになるので毛皮がよい。

足はわらで作ったツマゴがよい。アイヌは鹿の皮の靴、鮭やイトウの皮で作った靴の中にケリ草というものを乾かして詰めて履くので、温かく寒冷の心配がないという。洋風の毛皮を着けた靴はそれ程防寒の効果はない。食物は十分に用意するが、干し鮑は誠に重宝である。

マキリ（小刀）類の切れ物は必ず持つ。野宿する時などのほか甚だ便利なものである。雪を口にするとかえって渇きが止まず、注意することである。

沖村街道のムシナ

竹内コト

私が子供の頃に聞いた話ですが、昔はこんな話がいろいろあったようです。

この間、豊浜トンネルで思ってもみなかったような大災害が起きて、町内の人であればみんな知り合いの家であり、亡くなられた方や家族のご心中を思うと胸が痛くなります。合掌をして励ましの言葉をおくります。

今の豊浜町は以前は湯内村といって、ほんの数えるくらいの家が並んでいるだけでした。そこから、当時、浜町で豆腐屋さんをしていた柳川さんに豆腐を仕入れに来るじいさんがいました。ゴマ塩頭で小太りのあまり背の大きくない人でしたが、背中に木箱を背負って湯内から歩いて来るのです。

その頃、私は○松尾さんの番屋にいましたからちょいちょい見かけてよく知っていました。

そのじいさんは、豆腐といっしょに油揚げも木箱に入れていたところ （次ページ下段へ）

岬短歌会詠草

喜寿すぎし同級生の賀状来ぬ牛飼のおばさんより町長夫人より　長崎フユ

「いつまでも若く外出をたのしんでね」わが傘寿に孫は杖を呉れていふ　池田テル

衿の毛皮惜しみて色の褪せたれど羅紗のオーバー捨てがたくをり　竹内コト

役場前の銀杏にオンコにイルミネーションされて華やぐ街の明るし　菅原節子

一生の中の生きがひと妻は年老いて踊りをならひ三年過ぎぬ　越野敏雄

一面に雪降りおける石狩野にほカバーの青朝の日に映ゆ　鈴木時子

婦人会の新年会は静かなり除雪の疲れを互みに言ひて　田中香苗

前浜のテトラポットをこゆる波白くくだけて車道にしぶく　東美和

ひとり居のわれは亡き夫のしきたりを守りて元旦の膳に向へり　榊佳代

不在にて会えずに帰る玄関に君活けし白き梅の匂へり　山口スヱ

今朝の陽は亡き母の優しき胸のごと荒れゐる海を照らして昇る　堀典子

ふるさとの訛に似しを懐かしみ「蔵」読み終へぬ吹雪くひとしを　轟木富美子

大雪に窓から出ててドアあけぬよくも降りしと空を眺めぬ　越田由起子

浜町の家並にあふるる新年の灯りあつめたし腕の中に　堀昭子

吹雪くなか給食弁当届けゆく礼のことばに励まされつつ　丹後初江

まゆ玉を飾りて部屋の華やげば孫二人並び小さき手を打つ　金杉すみ

雛人形に憧れしわが五十年子生さぬ我の秘め事ひとつ　魚屋友子

冬山のモイワの上にゐる雲の夕ぐれむとし黄の色となる　片山栄志

後志　昭和

一、ハァー　唄へ唄へよチョイト鰊の春を
ヤレコノサ　サノ　ヤレコノサ
かもめどりさえ朗らかに踊る
俺が心も　エー朝日に染めて
ソレヨイヨイヨイと来てヨイと踊れ
鰊後志　日本晴れ

二、ハァー　咲いて嬉しやチョイト林檎の花は
ヤレコノサ　サノ　ヤレコノサ
娘心の花嫁化粧
花の盛りを　エー一枝折って
ソレヨイヨイヨイと来てヨイと踊れ
花の後志　日本晴

三、ハァー　白帆流れてチョイトそよ風うけて
ヤレコノサ　サノ　ヤレコノサ
心浮き浮き蘭島、塩谷
女浪男浪の　エー囁く中で
ソレヨイヨイヨイと来てヨイと踊れ
夏の後志　日本晴

この歌の歌詞は五番まであって、四番は昆布温泉、五番はスキーのニセコと羊蹄山と、後志の産業と観光を歌っている。昭和七、八年頃、ポリドールレコードから発売され、歌詞は威勢が良かったが、売り行きの方はどうもパッとしなかったらしい。

古平ホトトギス会

やり烏賊の獲れて積丹活気づく　岩瀬みのる

廃線の駅とはかなし秋の雨

春寒し願ひむなしき娘の御霊　仲谷比呂子

夏場所の相撲太鼓や隅田川

グランドに夕郭公の来てをりぬ　福井久美

寒干のすけそ軒並ありし町

梅便り菜の花便り雪五尺　熊谷楠治

さらさらと木々に風あり彼岸寺

トンネルの罅より垂るゝ氷柱かな　越野清雄

潮匂ふ渚づたひや春の月

玻璃戸開け雪掻き撒けり雀の餌　越野敏雄

孫まねし賀状の達磨たのももしく

日々山の襞濃くなりぬ雪解風　福井幸平

簡単に掃いて終りし春の雪

積みあげし雪の汚れて春近し　木村芳園

雪を掻き今日商いの戸を開く

冬伐採神木に遺す岳樺　水見句丈

対岸の雄冬鱈場はどのあたり

すそわけの若布朝餉のよく匂う　越野スミ子

爐話や京ゆく旅のつきるなく

水温む稚魚放つ日も遠からじ　斉藤波留

母好きな牡丹雪さげて彼岸会へ

手火鉢に膝を近づけ法話きく　仲谷美砂

冬涛に打ち叩かれし夫婦岩

陸揚げのすけそまたゝく間に凍る　大和田絵伊

浜出しの昼はおにぎり根深汁

初孫の婚の船出や星月夜　大島喜恵

一人居の夜長まぎるゝ娘の電話

さようなら　蓮実先生

福井幸平

蓮実先生長い間御苦労様でした。今月いっぱいで七十五年間やってこられた病院を閉じるそうで、洵に残念と言うか名残り惜しいと言うか？　蓮実先生の胸中如何ばかりかと御察し申し上げます。いつかこの様なこともあろうとは思っていましたがこんなに早く決断なさるとは驚きです。個人としても言葉にならぬ程御世話になり、母初め家族全員何かと御親切にして頂いて有難く御礼申し上げます。

公人としてもトリムクラブの育成、古平体育連盟の会長としても長く貢献され、文部大臣賞まで受けられました。古平の社会体育の発展に大きなはずみをつけられた功績は、先生自らの汗と御努力の賜物だと思っております。先生はよく言われまて言葉に、人間やれば出来ると私に申されました。古小同窓長時代、会員名簿作成の募金集めも予定をはるかに越える結となりました。少しばかり御手伝いをした一人として忘れるとが出来ません。

先生、随分あれこれといろいろな事がありましたね。先生、御苦労様でした。有り難う御座いました。それにしても医師として、公人として少し働き過ぎた様ですね。おそらく古平一忙しいお方だったかと思う。多分金属疲労が早く来たのかも知れません？　ゆっくりお休み下さい。あとになりましたがここまで先生を支えてこられた奥様の御苦労も大変なものだったと御推察致します。私の想像ですが、病院の経営その他はほとんど奥様のお力かと思っています。よく頑張られました。人生まだまだこの先があります。否これからが本番です。どうか先生と仲良くいつまでもお倖せにお過ごし下さい。お別れの言葉としてはなんの準備もなく、思いつきの走り書きになって仕舞って恐縮ですが、私の気持ちをセタカムイ誌を通してソット述べて見ました。さようなら

蓮実先生、奥様お元気で

■俳誌『桑海』巻頭句入選

雪路を滑り止めある亡夫の杖　山口浪

亡夫の杖持ち出し雪のポストまで

■俳誌『ホトトギス』入選句（幼稚園の頃）

あめやんで　にじがくっきり　きれいだなぁ　仲谷安代

ひまわりが　かぜにゆられて　たのしそう

物眼録

あさがお

三、四年前のこと、浜町の鰊場をしていたある旧家が改装するというので、整理する物の中に、資料として保存しておきたい物があったら貰ってこようと思って出かけた。

行って見ると道路ぶちに、陶器で紋様の入った小便用の便器があったので、これは"掘り出し物"とばかりありがたく頂戴して来た。

戦前だと、便所といえばその言葉からうける印象も悪かったが、特に田舎では「くさい」「きたない」「くらい」と、流行語で言えばまさに「3K」で、冬になるとこれに「寒い」というオマケまでつく。一般の家庭では便器といっても板で枠を作った程度で、毎日お世話になりながらも一番嫌われるところであった。

当時、大宅(おおやけ)といわれるような家では陶器製の便器を使っていて、それらは古くは北前船で、大正時代は汽船で日本海航路で運ばれてきたものだろう。

この便器は壁に取りつけて使うが、その形がちょうどアサガオの花に似ていることから『あさがお』という名がつけられているが、日本人の優雅で、こまやかな感情のよくあらわれている名であるといえよう。

便器の『あさがお』は白地に青系統の色が使われていて、絵柄も美しく、花模様のものが多いが、なかには山水を描いたものもある。また、何色かで彩色をしているものもあるが、ここにあるのは三色が使われていて黄色が鮮やかである。

〈写真〉 ―― あさがお ――

これはもう大分前の話であるがホントの話――。あるアメリカ人のお宅を訪問した人が、玄関に花を挿してある容器を見てびっくりした。それはなんと便器の『あさがお』だったのである。アメリカ人の感覚からは、それはまたとない東洋のすばらしい花器？　に見えたのかも知れないが、果たしてもとは何であったのかを知っていたのだろうか。しかし、便器にもこれだけ凝った、日本人の美的なセンスも大したものである。

ついでに蛇足を――。昔はどこの家にも夏になるとアサガオの花が咲いていたものだか、この頃はさっぱり見ることもなくなってしまった。

ところが去年の夏、沢江の丹後藤雄さんのお宅のそばにある倉庫の板壁に、一面、アサガオの花が咲いていた。昔から日本人に愛されて詩や歌にうたわれてきた花だけに、誰しも愛着が深いのではないだろうか。ほんとに懐かしい、なにかほっとした気分になった。

朝顔や古平の夏ここにあり

先号でお知らせしました『古平の方言』ですが、ご希望が多くて現在品切れです。内容を改めて、また近く発行しますのでその際にご利用くだされば幸いです

遥かなる故郷の思い出 19

"サンマは寝て待て"の話（中）

橘　義春

次の日はいよいよサンマ漁の初日となったが、誰もサンマ漁に出る船はない。俺たちだけであった。

正吉さんも、「沖へ出てみないことにはサンマが来ているかどうかは分からない」という。天気の方は快晴、海はトロ凪でサンマ日和となってくれるか？二人は磯舟に乗り、一番岩のところでゴモを採り丸山岬の沖合いでいかりを入れた。

早速、枠組を作り、それにむしろを張ってゴモをいっぱいぶら下げた。四角い穴を二つあけむしろを磯舟の側につなぎ止めた。

さてこれで用意万端ととのったものの、海の中をのぞいても肝心のサンマは一匹も見あたらない。

「これで大丈夫かな？」

と思っていたら、沖の方から海草が流れて来た。正吉さんはそれを素早く拾い上げて海草を見ていたが、

「やっぱりサンマは来ているぞ見でケレ、ほらサンマの卵でいっぱいだべサ」

と、海草を投げてよこした。よく見ると鰊の数の子を白くしたような卵がいっぱいに付いていた。サンマの卵というのを初めて見た。サンマは、海の浮遊物のなんにでも卵を産みつけるそうだ。

「さァー寝べ寝べ、サンマが来たら起きればエエ」

と、正吉さんは早々と横になり寝てしまった。

「ほんとにサンマが来たらわらるのかなぁ」

と思ったが、起きていてもやることもないので横になった。しかし初めてのサンマ漁だし、少し興奮していてなかなか眠れなった。

横になって三十分ぐらいたったろうか、風もないトロ凪なのにザワザワと波の音がしたようであった。起き上がって海を見たら、舟の周りの海だけが真っ黒になっている。黒い影のような水の中でキラッキラッと光ったものが見える。

「何だろう？」

とにかく正吉さんを起こしてみよう。

「何だか舟の周りが真っ黒になったよ」

むっくり起き上がった正吉さんはひと目見るなり、

「サンマだ、サンマだ、たいした数だ。すぐかかるぞ！　かっぱズボンをはけ、俺のやる通りにやってケレ」

なる程"サンマは寝て待て"とはこのことか。

サンマをつかみ損なって逃がすと、サンマの群れがそれについて一斉に逃げ出してしまうそうである。無理をしないようにと言われた。

「さぁーいよいよ俺もやるか」

指の間にサンマが突っ込んで来るなんて気味が悪いが、ここはひとつ我慢するか。

おそるおそる四角い穴に手を入れて指をニギニギした途端、いきなり両手の指の間に二匹ずつ突っ込んで来た。それ来た！とばかりに指をギュッと締めつけサンマを獲り込んだ。なんといっぺんに四匹だ。こうなるともう気味が悪いなどといってはいられない。

次から次と指の間に入ってくるやつを、かたっぱしから舟の中へ放り込んでいった。

――つづく――

（前ページより）その匂いでムジナにとりつかれ化かされたそうです。

ある冬の吹雪の日のことでした。じいさんはいつものように豆腐と油揚げの入った木箱を背負っての帰り道、沖村街道の二番目のトンネルの中で木箱を下ろして一服しているうちに、なんとなくウトウトしてしまいました。すると油揚げのいい匂いをかぎつけたのか、一匹のムジナが出て来てじいさんにいたずらを始めました。じいさんは立ち上がると海に下り、冷たい水に足をつけては道路まで戻り、またそれを繰り返しているうちに寒さでとうとう死んでしまったということです。冬になると当時はわらで作ったツマゴというものを履いていましたが、そのツマゴもすっかり氷りついていて、木箱の中の油揚げも全部無くなっていたそうです。

沖村街道では、昔からずいぶんとムジナやキツネにだまされた話とか、お化けや幽霊の怪談が語られてきましたが、今は車でひと走りです。すべてに便利になった今、荷物を背負って沖村から湯内までの山越えをして商売していた、あのじいさんの話をふっと思い出すことがあります。

《大網禁止令》の廃止

網切り騒動（3）

▼請願に対し藩からは厳しい達し

この「網切り事件」はもとはといえば、請負人が自分たちの利益のため禁令を犯したことが原因なので、その年の五月、この度の騒動についての始末書を出した。そしてその中で、笊網や起し網など大網の使用が刺網漁業者の妨害になっていないこと、大網の使用はやむを得ないものであったあったこと、また、場合によって雑魚網（大網）を使うことがあるかも知れないが、その時は再び漁民との紛争が起こらないように取り締まっていただきたい、ということを改めて請願した。

これに対し藩は七月、クトウからアツタまでの大網の使用を厳禁し、もしこれに背く者があれば漁具を焼き捨て、請負人は場所を取り上げ、出稼人は蝦夷地での出漁を取り消すという厳しい達しを出した。

これに驚いた請負人たちは、大網を急に廃止して刺網を作るのは大変困難であることを申し立て、格別のお情けをもって何とか三年間猶予を、と願ったが、これも駄目だと却下されたことからさらに八月、嘆願書を出したが十月になり、「久遠場所から厚田場所まで大網の使用一切相成らず」と厳しい達しがあり再び却下されてしまった。

▼漁民も大衆行動で反対

前浜で漁業する漁民の側に立つ藩と、場所請負人側とは完全に対立したが、請負人側も極めて強硬で一歩も譲らず、十一月になると大網を使用している者の中に箱館（函館）奉行所に訴える者も出て、藩と箱館奉行所の問題にまで発展した。これに対抗して、江差から熊石辺りまでの漁民が立ち上がり、およそ三千人程が江差役所に押しかけ大網の全廃を嘆願するという騒ぎになった。

▼一か年を限り大網使用を許可

これを知った箱館奉行所は、事の重大さから藩にその状況をたずねた末、まず一年に限り今まで通り大網の使用を許し、その後は十分調査の上で決めることにした。

これを聞いた江差周辺の漁民は、翌安政三年の正月、数百人が乙部村に集まり江差役所に大網全廃を訴えたが、藩の役人の説得でしぶしぶ退散した。

またこの頃は、日本とロシヤとの間にいろいろと問題が起きていることから、松前の周辺を残して蝦夷全島は幕府が直接治めていた。そのようなことから、藩としてもどうしていいか対策に苦しんでいたのである。

そしてこの『網切り騒動』は箱館奉行所によって決着がつけられ、それまでの藩の大網禁止令は廃止され、大網が鰊漁業の主導権をにぎるようになり、このため財力のある業者（親方）と、小漁師、漁夫などという階層がはっきりしてきた。

▼大網使用の業者から冥加金

安政三年（一八五六）箱館奉行所は、試しに一か年に限り大網一か統について三両の冥加金（一種の税金）を徴収して使用を許したが、皮肉にもその年は前浜の鰊漁が大漁となったことから大網の使用が前浜の不漁とは関係がなく、刺網の妨げになっていないことが偶然にも証明されるような結果になった。

※（一ページ下段より続く）りんごの落ちたのが草のかげなどにあって、腐りもしないでいきいきとしているのがある。このりんごの味が、また格別にうまかったことを覚えている。

鰊漁の終わる五月の始めから下旬にかけて、鰊の建網にローソクボッケ・中ボッケ、それにヤリイカが来るが、その頃はローソクボッケは油がないので魚粕にしていた。中ボッケやヤリイカは鮮魚として、小樽方面の商人に生売りしていた。

刺網には中ボッケやソウハチ鰈がよく掛かった。ホッケで外割り（ほかわり）をつくり、鰈は干し鰈にした。

これらのホッケ・鰈・イカなどは、鰊の大漁の年ほど多く獲れたのである。

（つづく）

発行が遅れお詫びいたします

毎月一日には発行するようにしておりましたが、新しいワープロを使ったところ慣れないため編集に手間どり遅れてしまいました。お問い合わせをいただいたりして申し訳ありません。